カフカの『隣り村』における「主観」世界と「事実」世界の対立――『木々』との構造的類似性――

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-05-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西嶋, 義憲
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069452

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

カフカの『隣り村』における「主観」世界と「事実」世界の対立

――『木々』との構造的類似性――

西　嶋　義　憲

0.　はじめに

フランツ・カフカ（Franz Kafka）の作品の中には，常識的な知識では解釈が困難な内容の作品がある。たとえば，小品の『木々』（*Die Bäume*）や『隣り村』（*Das nächste Dorf*）は，そのような作品の例と言えるだろう。この 2 作品は，テクストの解釈が困難な点では共通しているが，その解釈はまったく異なる文脈で議論され，これまで互いに関連付けられて論じられることがほとんどなかった。しかしながら，両テクストは，「主観」世界と「事実」世界の対立という観点からすると，類似の構造をもっているように見える。本稿の目的は，両作品の構造を対比的に分析することにより，その類似構造を明らかにすることにある。それにより，カフカ作品に見られる叙述の好まれるパターンの 1 つを指摘する。

1.　問題の所在

1.1.　テクスト

まず『隣り村』のドイツ語原文を引用する。ただし，引用符内の文には，今後の議論のために便宜的に番号を付してある。

Das nächste Dorf

Mein Großvater pflegte zu sagen: „(1) Das Leben ist erstaunlich kurz. (2) Jetzt in der

Erinnerung drängt es sich mir so zusammen, (3) daß ich zum Beispiel kaum begreife, (4) wie ein junger Mensch sich entschließen kann ins nächste Dorf zu reiten, (5) ohne zu fürchten, (6) daß — von unglücklichen Zufällen ganz abgesehen — schon die Zeit des gewöhnlichen, glücklich ablaufenden Lebens für einen solchen Ritt bei weitem nicht hinreicht.“

(Franz Kafka. *Drucke zu Lebzeiten*, hrsg. von W. Kittler, H.-G. Koch und G. Neumann, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, p. 280)

このテクストの表面的な構造は，きわめて単純である。引用符によって導入される発話文の前に地の文が置かれ，引用される発言の場面設定が行われている。そして，引用符内の発言は，(1)と(2)－(6)というように，大きく 2 つの文に分けられる。この 2 文の関係は，「テーゼ」と「その説明」，すなわち，比喩の用語を援用すれば「被説明項（explanandum）」と「説明項（explanans）」と見なされるものである。

以下では，『木々』のテクストとの構造的類似性を論じることができるよう，この短い文章のうち，対応しうる発言部に限定して分析する。

1.2. 『隣り村』の論理構造

本節では，*Mein Großvater*〔私の祖父〕の発言部を対象に分析する。まず，トピックセンテンスとして(1) *Das Leben ist erstaunlich kurz.*〔人生は驚くほど短い〕という主観的なテーゼが提示される。「主観的」と述べたのは，(1)が，*Das Leben ist kurz.*〔人生は短い〕[1] という人口に膾炙した単純な構文に，*erstaunlich*〔驚くほど〕という主観を示す副詞が挿入されているからである。この文は，それ以降の展開からすると，被説明項にあたるので，次に期待される文は，そのテーゼを具体的に説明あるいは補足する説明項である。実際，次に来るのは，(2) *Jetzt*

1) 斉藤(2004)は，ヒポクラテスの有名な箴言「人生は短く，術のみちは長い」が後世においてどのように引用，解釈されてきたかを検討している。なお，セネカ（2010）の訳注には，後半部の「術」について，「『術(ars)』は，医術も含めた『学術』，『学芸』の意」と説明されている(p.199)。

in der Erinnerung drängt es sich mir so zusammen〔今，自分の記憶をたどるとあれやこれやが一斉に押し寄せてきて一塊になってしまっている〕という自分の記憶の状態を表明する文である。これは，(1)の主観的テーゼを自分の身に引きつけて肯定的に展開する，話者の主観的な経験世界を提示する文だと理解できる。そして，そこに含まれる副詞 *so* と次に来る文の接続詞 *daß* が呼応して，(3) *daß ich zum Beispiel kaum begreife,* (4) *wie ein junger Mensch sich entschließen kann ins nächste Dorf zu reiten*〔たとえば，ほとんど分からないことがあり，それは，どのようにすれば若者が隣り村へと馬を駆って行こうなどと決心できるのかということだ〕という主張が後続する。その若者の決断の際に伴うことが予期される心配が生起しないという状況が説明される。すなわち，(5) *ohne zu fürchten,* (6) *daß — von unglücklienen Zufällen ganz abgesehen — schon die Zeit des gewöhnlichen, glücklich ablaufenden Lebens für einen solchen Ritt bei weitem nicht hinreicht.*〔—不運な出来事は度外視するとして—通常の，首尾よく流れ行く人生の時間でさえそのような騎行には全然足りないかもしれないという不安を覚えることなく〕というように，(6)が *ohne zu* 不定詞句により導入され，そのような懸念は生じないと述べられる。

これらの発話の形式的論理的な流れをまとめると次のようになろう：

(1) 被説明項としての主観的テーゼ導入 → 説明項としての一連の文章［(2) 個人的経験からのテーゼの肯定 →（だから）→ (3)・(4)それに基づく主張 → (5)・(6)その主張内容の若者の決断に伴うはずの懸念の不生起表明］

たしかに，発話行為連鎖の構成として，このフローは，形式的・論理的整合性があるように見える。しかしながら，この形式的論理構成に具体的な意味内容を当てはめていくと，意味の理解が直ちに困難になる。つまり，このテクストがもたらす問題は，形式的論理性よりも，その内容にあると言える。

「隣り村」（das nächste Dorf）は文字どおり隣接している村落なので，常識的に考えて距離的に離れているとは想定しにくい。しかも，その近接地域へは時間のかかる徒歩ではなく，馬を駆って行くとすればそれほど多くの時間は要し

ないはずだと容易に推測できる。しかしながら，そのような常識的理解に反して，（6）*daß — von unglücklienen Zufällen ganz abgesehen — schon die Zeit des gewöhnlichen, glücklich ablaufenden Lebens für einen solchen Ritt bei weitem nicht hinreicht.*というように，副文内容が不定詞句 (5) *ohne zu fürchten* を用いて，付随的に表明される。たしかに，常識的な理解では，隣り村は，字義どおり隣接しているので，距離的に離れているとは考えにくい。しかし，この発言者は，隣り村に馬で出かけることが通常の人生の時間をかけても全く足りないことが心配になるはずだという前提で述べている。人生の通常の時間といえば，おそらく数十年はあるだろう。それにもかかわらず，そのような長い年月をかけても全く足りないことが予想されるはずなのに，それに不安を覚えずに若者が決断をくだしていると述べているのだ。これは，単純には理解することができそうにない。

この文章の面白みは，発言者の述べる距離と時間の扱いが日常的な距離・時間感覚と異なり，そこに齟齬が引き起こされている点にあると言えるだろう[2)]。そして，これまでその解釈をめぐってさまざまな考察がなされてきたわけである（Richter, 1962; Urzidil, 1965; Kraft, 1968; Tauber, 1948/1968; 松本, 1968; Ramm, 1971; Binder, 1975; Neumann, 1979; 牧, 1990; 坂内, 1992; 川島, 2001; 中村, 2006; Andringa, 2008; 横山, 2012 など）。

1.3. 問題設定

「私の祖父」の個人的な記憶に基づく距離・時間感覚と日常的なそれとのズレは，たしかに奇妙だが，そこには何らかの寓意が提示されているのだと考えれば，その寓意の解釈へと駆り立てられることになる。この作品の 1 つの解釈例として，たとえば，次のようなものがある（池内・若林, 2003, p. 133）。

隣り村に行くような時間は人生にはない，というのは実のところただ「祖父」

2) そのようなテクストの時間感覚と常識的な時間感覚とのズレはカフカの *Eine kaiserliche Botschaft*（『皇帝の綸旨』）でも描かれている。このテクストの言語学的分析については，西嶋(2018)を参照のこと。

にのみ当てはまるのかもしれない。しかしそれでもそれは「祖父」個人にとっては真実であり，彼は決して戯言を言っているわけではない。『掟の門前』と同様に，ここではある事柄がただ一人の人物にのみ通用し，しかも彼にとってはそれは逃れられない真実であるという事態が生じている。

この解釈のように，たしかに「祖父」の主観世界が提示されていると理解することができる。しかし，主観世界の提示のみにとどまっているようには思われない。では，主観世界が提示されているだけではないと思えるのは何によるのだろうか。本稿では，その寄って来る根拠が「主観」世界と「事実」世界の対立にあり，そして，その対立構造はカフカの別の小品『木々』のテクスト構造に類似していることを両作品を対比的に分析することにより明らかにする。

2. 分析

2.1.1. 叙実動詞（factive verb）としての *begreifen*

『隣り村』の発言部に出現する動詞 *begreifen* に注目したい。この動詞は辞書によれば，*erfassen*, *erkennen*, *verstehen* という語で説明される，「理解する」ことを意味する動詞である[3)]。このような理解や認識を表す動詞の中には，叙実動詞（factive verb/faktisches Verb）と呼ばれるものがあるが（Kiparsky & Kiparsky, 1970），*begreifen* はそのような叙実動詞に分類されると考える[4)]。叙実動詞は補文をとり，その話者はその補文の内容が真もしくは事実であることを前提にしていると説明される。しかしながら，語用論上，コンテクストによりその用法

3) たとえば，ある辞書には次のように語義が説明されている：„1. a) geistig erfassen, in seinen Zusammenhängen erkennen, verstehen“ (DUW, 2001, p. 248)。

4) Meibauer (2001, p. 46) には，*erkennen* が叙実動詞の例として挙げられている。この *erkennen* が *begreifen* の語義説明に使われていることから，*begreifen* を叙実動詞と見なしても差し支えないだろう。さらに，英語の文献には，*grasp, comprehend, see* といった理解を意味する動詞が叙実動詞の例として挙げられている（Kiparsky & Kiparsky, 1970, p. 145; Hooper, 1975, p. 92）。英語の *grasp* はドイツ語の *begreifen* に対応していることも叙実動詞として扱うことの根拠となろう。

に非叙実的な読みが生じる場合もあることが指摘されている[5)]。本研究は，叙実動詞自体に焦点をあて，その使用において，どのようにして非叙実的読みが出現するのかといった語用論上の問題を論じることを目的としていない。本研究では,『隣り村』で使用される叙実動詞 *begreifen* のもつ基本的な意味論的特性に基づき，話者は補文の内容が真もしくは事実であることを前提に話をしていると見なして，分析を進めることにする（グリーン, 1990）。この動詞を含む箇所を取り出してみよう。

(3) daß ich zum Beispiel kaum begreife, (4) wie ein junger Mensch sich entschließen kann ins nächste Dorf zu reiten,

(4)は，(3)の定動詞 *begreife* の補文である。この叙実動詞の使用により,「若者が隣り村へと馬で行こうなどとどのようにすれば決断できるのか」という補文の内容，すなわち，若者がそのような決断ができること自体を真もしくは事実であると話者（*ich*）が想定して提示していることになる。

2.1.3. 予想される事態が生起しないことを示す不定詞句 *ohne zu*

(5)の *ohne zu* 不定詞句の用法は，予想に反してある事態が出現しないという付帯状況を表す[6)]。当該箇所を再掲しよう。

---

5)たとえば，Reis (1977, p. 148)は，叙実動詞に分類される *wissen* について次のような非叙実的な用例を挙げている：„Helmut übertreibt bei allem: Wenn Erna hustet, weiß er gleich, daß sie Aids hat, und natürlich weiß er, daß Fritz die Reps wählt, weil er gerne einen Lodenmantel trägt.“ この場合の *wissen* は‘sicher sein’という確信度を示す表現として理解されると述べている。このように，語用論上，コンテクストにより叙実動詞が常に補文内容を事実もしくは真であることを前提にしているとは限らない。最近の研究では，叙実動詞の非叙実用法をいくつかの観点から説明しようとする試みがなされている（Field, 1997; Tsohatzidis, 2012; Rau, 2013; Dahlman and van de Weijer, 2022）。

6) この *ohne zu* 不定詞の用法について，Kempcke (2000)は，次のように説明している（太字による強調は著者による）。

“< als Glied der zusammengesetzten subordinierenden Konj. **ohne dass, ohne … zu;** der Nebensatz steht vor od. nach dem Hauptsatz> /gibt an, dass der einen Begleitumstand ausdrückende Nebensatz wider Erwarten nicht realisiert wird/: <das Vb. des Nebensatzes kann im Konj. II stehen> *er eilte vorbei, ~ dass er ein Wort an mich richtete/ ~ ein Wort an mich zu richten; sie half mir sofort, ~ dass ich sie darum*

(5) ohne zu fürchten, (6) daß — von unglücklichen Zufällen ganz abgesehen — schon die Zeit des gewöhnlichen, glücklich ablaufenden Lebens für einen solchen Ritt bei weitem nicht hinreicht.

(5)の *fürchten* は，非叙実動詞である[7)]。しかしながら，その動詞が埋め込まれている，前置詞 *ohne* を伴った不定詞句は，予想される事態が生じないという状況を提示する表現である。予想される内容は，後続する補文(6)の *daß* 節によって提示される事態である。懸念される事態である「—不運な出来事は度外視するとして—通常の，首尾よく流れ行く人生の時間でさえ，そのような馬での移動にははるかに足りない」ということが予想され，それが心配になるはずなのだが，そのような懸念は伴わないことが提示されている。

2.2. 主観性と事実性

上記の主観性と事実性という観点からこのテクストを改めて分析していく。

まず，文(1)「人生は驚くほど短い」は，人口に膾炙した「人生は短い」という一般的言説に，主観的な副詞 *erstaunlich* を加えて主観性をより強調して提示している。この言説を出発点に，その内容が確かかどうかを自分の記憶に照らし合わせて確認しようとするのが，後続する文(2)である。「思い返してみると，一生は怒涛の如く流れ，一塊のようになっている」と自分の現在の記憶の状態を披露する。ここでは，過去の記憶の総体としての時間と空間の縮小もしくは歪みが示唆されていると言える。すなわち，これまでの人生について，あれやこれやが押し寄せてきて一塊のようになっているという主観的な記憶の世界を提示し，(1)の内容が，自分の個人的な経験に照らし合わせても妥当であると主張している。そして，このように記憶を振り返ってみた結果，たとえば，ほとんど理解できないという事態が生じていると(3)で主張する。ここで，この「た

---

gebeten hatte/hätte; er ist nach Hause gegangen, ~ sich von uns zu verabschieden" (p. 729)

7) 次の IdS（Leibniz-Institut für Deutsche Sprache）のサイトによれば，*fürchten* は *nicht-faktisch* な内容の補文が来る語に分類されている。このサイトの情報は，古川昌文氏（広島大学）から指摘を受けた。記して感謝申し上げる：https://grammis.ids-mannheim.de/systematische-grammatik/2091 (2022 年 6 月 7 日アクセス)。

とえば（*zum Beispiel*）」という表現が何にかかるのかが問題になるが，これは，Urzidil (1965)も指摘しているように，いろいろある中での 1 つの事例を取り挙げるための表現である（p. 27)。通常，その直後に来る項目がその 1 例となる。だとすると，*kaum begreife* がその中から取り上げられた事態となると解釈するのが自然である[8)]。思い返すと，おそらく何十年にもわたる記憶の一塊の中では，いろいろなことが起っているのだが，その中でたとえば「ほとんど分からない」という事態が生じてしまっているということに焦点をあてていることになる。これは，祖父の記憶という主観世界での話である。では，何がほとんど分からなくなってしまっているのか，その内容が，(4)で提示される。その際，*begreifen* という叙実動詞が使われているため，たとえ，分からないという事態が記憶という主観世界内での出来事であったにしても，(4)の内容を，叙実動詞の存在により，現実世界での「事実」であることを話者が前提として提示していることになる。すなわち，話者は，「隣り村に馬で行くこと」が決断を伴う行為であり，なおかつ，その若者の決断行為を「事実」として提示しているのである。

若者が決断をくだす際には，さまざまなことを考慮することになろう。そのような中で不安を覚えるようなことが生じることも予想される。しかしながら，予想される不安を意に介さないことが付帯状況として(5)の *ohne zu fürchten* という不定詞句によって提示される。この *ohne* という前置詞を伴った *zu* 不定詞句

---

8) この小品の翻訳を見ると，英語訳を含め，ほとんどの翻訳で後続する補文にかかるように訳されているようだ。英語訳では，対応する表現である *for instance* が次のように補文の前に置かれている：“… that I scarcely understand, for instance, how a young man can decide to ride over to the next village …” (*The collected short stories of Franz Kafka*, edited by Nahum N. Glatzer, Harmondsworth: Penguin Books, 1988, p. 404 (Tranlated by Willa and Edwin Muir))。筆者の手元にある日本語訳 8 例のうち，英語訳と同様に「たとえば」を後続する補文にかかるように訳しているのは，牧(1990)で提示されている著者の試訳を除いた 7 例である。最近の日本語訳を取り上げて紹介しておこう：「…それで，わしはほとんど理解に苦しんでおる始末じゃ。たとえば，若い者なら，隣り村へ馬を走らせようなどとは，平気で決断することができて，それでいて…」（平野嘉彦『カフカ・セレクション I　時空/認知』ちくま文庫, 2008, p. 10）。この訳文からも，たしかに，補文にかかるように訳されていることが確認できる。このように訳すとすれば，本来なら，原文は „daß ich kaum begreife, zum Beispiel, wie ein junger Mensch sich entschließen kann ins nächste Dorf zu reiten“ というように，„zum Beispiel“が *wie* 節の前に置かれている必要があろう。しかしながら，原文はそのようにはなっていない。本稿では，原文に対応する訳を採用することにする。

は，予想に反してある事態が生起しないことを表わす表現なので，後続する節の内容は「予想される不安」として提示されていることになる。すなわち，「―不運な出来事は度外視するとして―通常の，首尾よく流れ行く人生の時間でさえそのような馬での移動には全く足りない」かもしれないという不安を覚えることが予想されるということである。したがって，人生をかけて隣り村に行こうとしても，生きているうちには絶対に到達できないかもしれないが，そのような不安は生じないと表現されている[9)]。

2.3. 『隣り村』の主観性と事実性の対立構造

『隣り村』の「私の祖父」による発言の構成は次のとおり：

(1) 「人生は短い」という人口に膾炙した言説の主観性の強調
(2) その言説の妥当性の，「記憶」という自らの主観世界での確認・肯定
(3) その記憶の中で，たとえば「ほとんど分からない」という事態出現を主張
(4) 「分からない」こととして，若者が現実に決断できるという「事実」の指摘
(5)・(6) 決断の際に予想される不安の不生起の説明

上記の構成を単純なフローとしてまとめると，次のようになる。

(1) 主観的言説提示 →(2)「主観」世界としての記憶状況提示 →（だから）→ (3)「主観」世界提示 →(4)「事実」提示 →(5)・(6)予想される不安の不生起提示

9) この懸念内容において，*gewöhnlich* という「通常の」,「いつもどおりの」を意味する表現（およびその直前に出現している *von unglücklichen Zufällen* という例外表記との対比）により，日常性に焦点があてられ，また，「到達できない」ということが *bei weitem* という句によって強調されてもいる。その意味で，予想される不安に，日常性と現実性が示唆されていると言えよう。

(3)から(4)に展開する際，過去の記憶という「主観」世界から現在（未来）の「事実」世界へと局面に変化が起きているように見える。この変化を図示すると次のようになろう。

過去　　現在（未来）

→「今」→

「主観」世界提示　　「事実」世界提示

この「主観」世界から「事実」世界への流れの変化は，『木々』の構造を思い起こさせる。次節では，『木々』の構造を提示し，上記の構造との比較を試みる[10)]。

3.　『木々』との比較

3.1.　『木々』の構造

『木々』のテクストを引用する。便宜上，番号をつけておく。

Die Bäume

(1’) Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. (2’) Scheinbar liegen sie glatt auf, (3’) und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. (4’) Nein, das kann man nicht, (5’) denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. (6’) Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

(Franz Kafka. *Drucke zu Lebzeiten*, hrsg. von W. Kittler, H.-G. Koch und G. Neumann, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, p. 33)

この文章は，まず，(1’) で比喩による主観的なテーゼが，理由を導く接続詞 *denn* によって導入される。しかしながら，次いでこのテーゼの説明が来るだろうとの予測に反して，話題となっている *wir* と *Baumstämme* の比喩関係から離

10) 『木々』のテクスト言語学的な分析については西嶋(1990)を参照のこと。

れ，*Baumstämme* を主題とした話題へと移行する。ここで注意すべきことは，この小品の(2’)と(6’)に出現する 2 つの *scheinbar* である。これは，文副詞と述語形容詞の 2 種が区別され，両者は言語表層上の振る舞いが異なる。すなわち，前者には強勢が置かれないが，後者には置かれる。したがって，その論理的意味も異なる。(2’)の文副詞としての *scheinbar* は挿入句と考えることもでき，知覚判断に基づく「主観」世界を表現している。他方，(6’)の述語形容詞としての *scheinbar* は事実判断を可能にする「客観」世界とかかわる。すなわち，(6’)は実際には違うという否定が含意される[11)]。このようにして，このテクストでは，(4’)と(6’)により，否定が 2 度繰り返されるが，その否定には質的な違いがある。(4’)による否定は「主観」世界に関する見かけ上の言明に対してなされるが，その根拠は(5’)の事実判断を可能にする「客観」世界を根拠にしている。他方，(6’)による否定は，「客観」世界に関わる言明に対してなされているため，その否定によってもたらされるはずの言明内容を予測することは難しい。

意味展開はおおよそ次のようになる。

(1’)我々は雪中の木々のようだ（直説法による主観的言説提示）→(2’)ちょこんと載っているように見える（文副詞 *scheinbar* による「主観」世界提示）→(3’)ならば一突きで動かせるだろう（接続法 2 式による「主観」世界提示）→ (4’)直説法による否定→ (5’)大地としっかりと結びついているから（直説法による根拠としての「事実」世界提示）→(6’)それだって，そう見えるだけ（否定（述語形容詞 *scheinbar*）：直説法による「事実」提示）

より単純化すると，次のような構造になっていることが分かる。

11）ある辞書には次のように書かれてある。“I.<Adj.> a) *aufgrund einer Täuschung wirklich, als Tatsache erscheinend, aber in Wahrheit nich wirklich gegeben*: das ist nur ein -er Widerspruch; er ist nur s. Unabhängig; b) (selten) *dem Anschein nach gegeben, vorhanden, bestehend*: -es Alter des Täters: 20 Jahre. II.<Adv.> (ugs.) *anscheinend*: sie hat es s. vergessen; er sucht s. Streit.” (DUW, 2001, p. 1366)

(1')主観的言説提示 →(2')「主観」世界提示 →（だから）→(3')「主観」世界提示→(4')事実としての否定 →(5')根拠としての「事実」世界提示 →(6')「事実」世界を根拠とした否定

このフローは,『隣り村』のそれと似ているように見える。比較してみよう。

3.2. 比較

『隣り村』と『木々』のフローを並べて再掲する。

『隣り村』のフロー
(1)主観的言説提示 →(2)「主観」世界提示 →（だから）→ (3)「主観」世界提示 →(4)「事実」提示 →(5)・(6)予想される不安の不生起提示

『木々』のフロー
(1')主観的言説提示 →(2')「主観」世界提示 →（だから）→(3')「主観」世界提示→(4')否定 →(5')根拠としての「事実」世界提示 →(6')「事実」世界を根拠とした否定

(1)から(2)ならびに(1')から(2')では，主観的な言説提示に基づいて，より具体的な「主観」世界の提示がなされている。また，(3)から(4)ならびに(3')から(4')の間で，提示される世界が「主観」世界から「事実」世界へと移行している。(5)・(6)ならびに(5')から(6')には顕著な対応関係は認められないが，このようにフローがほぼ並行して展開されていることが分かる。

4. カフカ作品における対立の構図

『隣り村』の発言部の論理展開は複雑に見える。これをより単純に構成しようとすればできないことはないように思われる。たとえば，次のように再構成すれば，より理解しやすくなるであろう。

Das Leben ist erstaunlich kurz. Deshalb begreife ich kaum, wie ein junger Mensch sich entschließen kann ins nächste Dorf zu reiten, obwohl es zu fürchten ist, daß schon die Zeit des gewöhnlichen, glücklich ablaufenden Lebens für einen solchen Ritt bei weitem nicht hinreicht.

（人生は驚くほど短い。そのようなわけで，若者が隣村に馬で行こうと，どうすれば決断できるのかが，わしには全くと言っていいほど分からない。通常の，首尾よく流れ行く人生の時間でさえそのような騎行には全く足りないかもしれないのに。）

原文には以下のように修正を加えた。まず，„(2) Jetzt in der Erinnerung drängt es sich mir so zusammen, (3) daß ich zum Beispiel kaum begreife,“の(2)の主文を省略し，(3)を副文から主文に変更した点，さらに，(5)の *ohne zu* 不定詞句の *ohne* を除いた *sein* 構文にし，付随的に認容を示す *obwohl* 節に埋め込み[12)]，*daß* 節内のダッシュで導入されている補足部を省いた点である。

上のような論理展開の発言内容だったなら，もちろん祖父の時間・空間感覚と日常的なそれとのズレはあるが，表層上このテクストはより理解しやくなるだろう。しかしながら，カフカの実際のテクストはそのような構成にはなっていず，„(2) Jetzt in der Erinnerung drängt es sich mir so zusammen,“という文が挿入されている。この 1 文がなくても十分に論理が通り，理解できるはずなのに，なぜこの 1 文が挿入されているのだろうか。この文が挿入されることにより，「主観」世界の出来事と「事実」世界との出来事の対立をより明確化されているように見える。だとするなら，カフカはこの 1 文をあえて挿入したのではないかと推測することができる。最初の発話は，形容詞 *erstaunlich* によって主観性が強調されている。(2)を挿入することで，その主観性をさらに明確に提示することができ，後述される「事実」世界との対立関係がより明瞭になるからである。このような操作を加えることにより，『木々』で見られる，「主観」世界と「客観」世界もしくは「事実」世界との対立構造を並行して作ろうとしたと推測する。

---

12) この箇所は，*da* 節にしても意味はほとんど変わらないであろう。ただし，*da* 節の場合，主節の前に置かれるのが普通のようであるが（Kempcke, 2000, p. 202）。

5.　おわりに

カフカの『隣り村』という作品は理解するのが難しい。それは，この作品で提示される時間・空間感覚が日常的なそれとかなり異なっていることによる。そのような異なりやズレは，一般に，そこに何らかの寓意を想定することにより解釈されうるものである。このような方向で多くの研究がなされてきた。しかしながら，本研究では，この作品の興味深い点は，そのような意味の世界にあるのではなく，むしろ，「主観」世界と「事実」世界との対立構造にあるのではないかということを示そうとした。そして，類似の対立構造は，カフカの他の作品『木々』にも認められることを例示した。この「主観」世界と「事実」世界とを対立させ，統一的な見方を提示しない叙述方法は，描写する世界を相対化するものである。このような叙述世界を相対化する方法は，別の形式ではあるが，カフカの他の作品においても認められる。たとえば，『判決』（*Das Urteil*）では，前半部がゲオルクの立場から世界が描写されるが，後半部では，父親との会話を通して，前半部で描写された事態が違った世界として再構築，再解釈され，相対化される。このように叙述される世界が多面的であることを表現する構図はカフカが好む文芸技法だと考えられる。

（金沢大学人間社会研究域経済学経営学系）

文　献

Andringa, Els (2008). Die Facette der Interpretationsansätze. In Bettina von Jagow und Oliver Jahraus (Eds.). *Kafka-Handbuch: Leben – Werk – Wirkung* (pp. 317-335). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Binder, Hartmut (1975). *Kafka Kommentar zu sämtlichen Erzählungen*. München: Winkler.

Dahlman, Roberta Colonna and Joost van de Weijer (2022). Cognitive factive verbs across languages. *Language Sciences*, *90*, 1-17.

DUW (2001). *Deutsches Universalwörterbuch*. 4., neu bearbeitete und erweiterte Aufl. Herausgegeben von der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, und Zürich: Dudenverlag.

Field, Margaret (1997). The role of factive predicates in the indexicalization of stance: A discourse perspective. *Journal of Pragmatics*, *27*, 799-814.

グリーン，ジョージア M. (1990). 『プラグマティクスとは何か：語用論概説』.（深田 淳訳）産業図書（Georgia M. Green: *Pragamatics and Natural Language Understanding*. Hillsdale; Hove: Lawrence Erlbaum, 1989）.

Hooper, Joan B. (1975). On assertive predicates. In Kimball, John P. (Ed.) *Syntax and Semantics*, *Vol. 4* (pp. 91-124). New York: Academic Press.

池内 紀・若林 恵 (2003). 『カフカ事典』. 三省堂.

川島 隆 (2001). カフカの息子たち —短篇『十一人の息子』読解—. 京都大学大学院独文研究室『研究報告』, *15*, 45-69.

Kempcke, Günter (2000). *Wörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Berlin; New York: de Gruyter.

Kiparsky, Paul & Carol Kiparsky (1970). Fact. In Manfred Bierwish and Karl E. Heidolph (Eds.), *Progress in Linguistics: A Collection of Papers* (pp. 143-173). The Hague; Paris: Mouton.

Kraft, Werner (1968). *Franz Kafka: Durchdringung und Geheimnis*. Frankfurt/M.:Suhrkamp.

牧 秀明 (1990). カフカの『隣り村』について. 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』, *23*, 45-54.

松本 嘉久 (1968). カフカの作品における時間概念. 慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』, *25*, 401-414.

Meibauer, Jörg (2001). *Pragmatik*. 2, verb. Aufl. Tübingen: Stauffenburg.

中村 寿 (2006). カフカにおけるユダヤ的テーマ：カフカのシオニズム批判. 北海道大学ドイツ語学・文学研究会『独語独文学研究年報』, *33*, 88-108.

Neumann, Gerhard (1979). c) Die Arbeit im Alchimistengäßchen (1916-1917). Hartmut Binder (Ed.), *Kafka-Handbuch Bd. 2. Das Werk und seine Wirkung* (pp. 313-350). Stuttgart: Kröner.

西嶋 義憲 (1990). カフカのテクスト *Die Bäume* を理解するために —テクストの多層性について—. 「かいろす」同人『かいろす』, *28*, 31-44.

西嶋 義憲 (2018). カフカのテクスト *Eine kaiserliche Botschaft* の構造—文芸技法の言語学的分析—. 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系『言語文化論叢』, *22*, 57-78.

Ramm, Klaus (1971). *Reduktion als Erzählprinzip bei Kafka*. Frankfurt/M: Athenäum.

Rau, Jennifer (2013). Wie faktiv sind faktive Prädikate? *Linguistische Berichte*, *233*, 51-67.

Reis, Marga (1977). *Präsuppositionen und Syntax*. Tübingen: Niemeyer.

Richter, Helmut (1962). *Franz Kafka: Werk und Entwurf*. Berlin: Rütten & Loening.

斉藤 博 (2004). ヒポクラテスの箴言「人生は短く，術のみちは長い」について. 『埼玉医科大学医学基礎部門紀要』, *10*, 61-75.

坂内 正 (1992). 『カフカの中短篇』. 福武書店.

セネカ (2010). 生の短さについて. 大西英文訳『生の短さについて 他二篇』(pp. 9-64). 岩波書店（岩波文庫）.

Tauber, Herbert (1968). *Franz Kafka: An Interpretation of his Works*. Port Washington, N.Y.: Kennikat Press. (Original work published 1948)

Tsohatzidis, Savas L. (2012). How to Forget that “know” is Factive. *Acta Anal*, *27*, 449-459.

Urzidil, Johannes (1965). *Da geht Kafka*. Zürich; Stuttgart: Artemis Verlag.

横山 明弘 (2012). カフカの暗号を解く：十一人の息子たちと十一編の物語との対応へのひとつの試み. 首都大学東京・東京都立大学大学院独文研究会『METROPOLE』, *33*, 35-70.

Der Kontrast zwischen der „subjektiven“ und der „faktischen“ Welt in Kafkas *Das nächste Dorf*:

Eine Analyse der strukturellen Ähnlichkeiten mit *Die Bäume*

NISHIJIMA Yoshinori

Einige von Kafkas Werken sind mit Alltagswissen nur schwer zu verstehen. Die Kurzgeschichten *Die Bäume* und *Das nächste Dorf* zum Beispiel können als solche Werke bezeichnet werden. In der Tat haben beide Werke eine gemeinsame Schwierigkeit, ihre Bedeutungen zu interpretieren, aber ihre Interpretationen wurden bisher in völlig unterschiedlichen Zusammenhängen diskutiert und nie miteinander in Verbindung gebracht. Beide Texte scheinen jedoch eine ähnliche Struktur in Bezug auf die „subjektive“ und die „faktische“ Welt zu haben. Ziel dieser Arbeit ist es, durch eine linguistische Analyse ähnliche Strukturen in beiden Texten zu identifizieren und bestimmte narrative Muster in Kafkas Werken aufzuzeigen.

Die Schwierigkeiten, *Das nächste Dorf* zu verstehen, ergeben sich aus der Tatsache, dass Zeit und Raum in diesem Werk eine ganz andere Bedeutung haben als im täglichen Leben. Daher wurde versucht, diese Verstehensschwierigkeiten als Allegorien zu interpretieren und zu erklären. Die vorliegende Arbeit hat jedoch gezeigt, dass der wichtige Punkt des Werks nicht in der Bedeutungswelt als solcher liegt, sondern vielmehr in der formalen Opposition zwischen der „subjektiven“ Welt und der „faktischen“ Welt, und dass eine solche oppositionelle Struktur auch in anderen Werken Kafkas wie *Die Bäume* zu finden ist. Die oppositionelle Struktur, die in den Werken zum Ausdruck bringt, dass die erlebte Welt durch den Gegensatz zwischen der „subjektiven“ Welt und der „faktischen“ Welt dargestellt wird, gilt als eine der bevorzugten literarischen Techniken Kafkas.